

技術研修についての分子研の役割

分子科学研究所長 伊藤 光男

大学、研究所にとって、研究施設、設備を支え、さらに新技術を開発していただく、技官の方々の存在は非常に大きく、研究の質はこれら技官の技術レベルによって決まる、と言っても過言ではない。最近の技術進歩は目ざましく、技官の方々が最新の技術を修得し、新しい研究の展開に貢献することが、強く求められている。にもかかわらず、大学、研究所における技官をめぐる情勢は極めて憂慮すべき状況にある。度重なる定員削減により、技官の絶対数が著しく減少しているにもかかわらず、一方では増えつづける研究設備が、技術要求に対応する日常的業務に忙殺され、その結果、技官として最も必要な新技術の修得や、技術向上がほとんど行われない状態になっている。また、一般的に技官の流動性は悪く、技術交流の機会が極めて少ないことが、事態をますます深刻化しており、技官の勤労意欲の低下につながっている。このような閉塞的な状況に対して、有効な手が打たれないままで推移している。

一方、分子研のような大学、共同利用研の場合、全国の研究者との交流が、共同研究等を通じて日常的に行われており、双方の研究者の活性化に大いに役立っている。同じような事がお互いの技官の間でも行なうことができれば、技官の活性化につながるかも知れない。また、分子研のような所が、そのような役目を果たすことも、大学共同利用機関としての、義務の一つでないかとも考えられる。

たまたま、昨年、某国立大学の教授から、自分の研究室の技官を、技術修得のため、一定期間分子研の施設に派遣したいが受け入れてもらえないだろうかという相談を受け

た。至極当然な要望で、別に問題はないと簡単に考えていたのだが、よく調べてみると技官の研修受け入れについては、正式な制度や予算もなく、研究者受け入れの場合と、全く事情が異なることが分かった。研究と技術は、表裏一体にあると考えれば、これはおかしな事であると言わざるを得ない。そこで装置開発室長である北川禎三教授に、受け入れについて具体的な検討をいただき、一方では、管理局のご理解と予算面でのご配慮をいただいた結果、大学に所属する技官を、一定期間、分子研の研究施設に研修の目的で受け入れるための、技術研修制度を発足させた。この制度によって、平成7年度に他大学から、7名の技官の方々を受け入れた。派遣側、受け入れ側双方にとって、非常に好評であり、平成8年度も続けて実施する予定であり、将来的には正式に制度化して、定着をはかりたいと考えている。

現在のところ、受け入れ体制、予算等の種々の制約があり、一つの小さな試みに過ぎないが、これが皆さんのご協力で、より力強い歩みとなり、新しい技術の習得、向上に資するとともに、将来的には、技官の人事交流につながるよう願っている。もしこのようなことが全国の大学、共同利用研で行うことができれば、各研究所での規模は小さくても、全国的な流れとなって、全国の技官の活性化と、研究技術の飛躍的向上につながるものと信じている。分子研がこのような大きな流れをつくるよう、お互いに努力しようではありませんか。



「正面から見た分子科学研究所」

研究者の品定め

分子科学研究所長 伊藤光男

いきなり昔のことで恐縮ですが、今を去る38年前の1960年にアメリカのウイスコンシン大学に博士研究員として留学し、そこで2年を過ごしました。当時はアメリカと日本の格差はものすごく、驚くことばかりでしたが、そのなかの一つは大学の技官（テクニシャン）が非常に尊敬され、また社会的地位も高かったことです。ベテランの技官の場合、古株の教授より給料がよいと噂されていましたし、現に大きな力と影響力を持っていました。

留学前までは九州大学理学部で助手として研究を行っていて、そこでは理学部の工場の技官の方々に装置の製作等で大変お世話になりましたが、だいたい欲しいものがあれば自分で設計し、それを持ち込んで技官の方に製作を一方的にお願いするというパターンでした。アメリカで大変違うと思ったことは、頼みに行った時、その装置なり部品なりがどのような研究に必要で、その研究がどのように重要であるか、また要求する精度等の根拠について説明を求められることでした。留学して間もない時、ある小さな金属部品の製作をマシンショップに頼みに行ったとき色々説明を求められ面食らいました。英語もよくできなかつたせいもあって納得させることができず、結局、撃退されました。

それで注意してみると、ベテランのテクニシャンは研究者を品定めていることに気がきました。とくに新任の教授、助教授がくると、ベテランのテクニシャンが当たりをつけた新参者に何かお役にたつことがないかと打診することから始まります。そして自分やその部下はどのような事が得意で今までこれだけの実績をあげてきたと大いに宣伝します。その上で、研究内容や計画を問いただします。これはまさに新参者にとってはテストとして、研究内容なぞ分からないだろうとたかをくくると飛んでもないことになります。ベテランテクニシャンはよく勉強していて、研究の重要性やユニークさを見抜く力を持っており、それをアピールできなければ見放されてしまいます。また彼らは研究者（主に実験屋）がユニークで独創的な研究をすすめる時、実験方法や装置等でかならず新機軸なり工夫があるはずであり、それには絶対に技官の助けを必要とすることを確信しているのです。市販の装置等だけで事たれりとする研究者には

見向きもしません。こうしてベテランテクニシャンが納得すればとことん入れ揚げしてくれるのです。これには日本とは少し異なる事情があります。アメリカの教授、助教授の研究費はそれぞれ各自が外部から獲得してきたファンドがほとんどであり、その用途にはかなりの自由度があり、人件費をふくめた技術支援に支出することが出来ます。そのため、よい研究で大きなファンドがとれそうな研究者にめぼしをつけ、それに賭けるという面があります。自分たちの技術的貢献で研究者がよい仕事をすれば、それに伴ってファンドも入り、自分たちの実入りもよくなるというわけです。また、技官にたいする研究者の評価が高まれば、引く手あまたになり、場合によっては好条件で他大学等に引き抜かれることもあります。

日本はアメリカと違って報酬は期待できないとしても、その研究に共感できるものがあれば、それにのめり込むという事があってもよいのではないのでしょうか。そのために分子研でも技官の方々が研究者の品定めをするべきでないのでしょうか。研究者はつねに他人とは違う研究をめざしています。市販の装置のみに頼るようでは所詮、皆と同列の研究しかできません。違ったことをやるためには、工夫をこらさなければなりません。研究者はいつも、これができればな一、あれができればな一、と思いつんでいるものです。実験屋にとってそれは市販の装置だけでは満足出来ないことを意味しています。研究者はこのような悩みを技官の方々に直接にぶつけることが必要ですし、またぶつけてくる研究者はほんものでしょう。

私の分子研での任期も終わろうとしています。任期中に技官の方々に何かお役にたてることのできたかどうか甚だ心許ない限りですが、技官奨励研究費の申請等を通じて分子研の技官の方々の研究熱心と研究者の役にたきたいという真摯な気持ちに打たれました。このような技官の方々の想いと研究者の想いと互に通ずるものがあります。しかし、今まで2者の間の意思疎通が充分であったとは言えません。手始めに新任の教授、助教授に研究計画を語っていただき、技官の方で品定めをすることをやったらどうでしょうか？勝手なことを言って申し訳ありません。最後ですのご勘弁ねがいます。

アジア学術セミナー「分子科学と分子材料」

伊 藤 光 男

1. セミナー開催まで

アジア学術セミナー(以下「セミナー」という)は、日本学術振興会(JSPS)の事業の一環として、アジア地域の若手研究者の育成と研究交流を図る目的で数年前より実施されているものであり、特定のテーマを設定してその分野で活躍中の一流の研究者による講演と関連する研究所、研究機関の見学から成っている。

1993年8月、ニューデリーで開催されたインド-日本科学会議において、長倉三郎教授(総合研究大学院大学長)とC.N.R. Rao教授(ネールセンター長)との間で、本セミナーを“分子科学と分子材料”のテーマの下で1994年11月にインドのバンガロールにおいて開催することが合意された。分子科学、分子材料は化学、物理、生物の境界領域として近年急速な発展を示している研究分野であり、単一分子の構造、機能に関する基礎的研究から分子集合体としての機能性材料の開発に至る広い範囲にわたっている。アジア地域におけるこの分野の研究活動は活発に行われており、とくに日本、インド、中国、韓国、台湾の研究水準は極めて高く、このことはこの地域で3人のノーベル賞分子科学者(インドのC.V. Raman, 日本の福井謙一, 台湾のY. T. Lee(本セミナーの講演者))を輩出していることからうかがえる。

これらアジア各国の研究水準は高いにもかかわらず、各国の分子科学研究

者間の研究交流、情報交換は欧米諸国に対するものと比較して稀薄であると言わざるを得ない。まして若手の分子科学研究者間の交流は皆無に近い状態である。この現状を打破し研究者、とくに若手研究者の交流を深めることは、アジア地域における分子科学、分子材料の研究に大きな刺激を与え研究の発展をうながすとともに、若手研究者の連帯感と友情を深めるのに大きな効果をもつものと考えられる。これはまさにアジア学術セミナー



図 セミナー会場のインド科学研究所 Faculty Hall (筆者のスケッチ)

表1 セミナー開催趣旨書(要約)

平成6年度アジア学術セミナー「分子科学と分子材料」

1. 趣旨

本セミナーは、アジアの若手研究者に分子科学及び分子材料について集中的な研修の機会を提供し、研究水準の向上及び研究者の養成に資することを目的とする。

2. 主催者

日本学術振興会
岡崎国立共同研究機構分子科学研究所
インド科学研究所
先進科学研究のためのジャワハラル・ネールセンター

3. 開催日及び開催地

1994年11月22日～12月2日
ジャワハラル・ネールセンター
(インド, バンガロール市)

4. 組織委員会

伊藤光男(岡崎国立共同研究機構分子科学研究所長)
長倉三郎(総合研究大学院大学長)
茅幸二(慶應義塾大学教授)
山口 兆(大阪大学教授)
岩村 秀(九州大学教授)
丸山有成(岡崎国立共同研究機構分子科学研究所教授)
吉原経太郎(岡崎国立共同研究機構分子科学研究所教授)
北川禎三(岡崎国立共同研究機構分子科学研究所教授)

の目的にほかならない。

こうして長倉-Raoの間の合意に基づいて、“分子科学と分子材料”に関するアジア学術セミナーを日本学術振興会とインド科学技術省(DST)が共同主催し、日本側は分子科学研究所が、インド側はネールセンターがそれぞれ世話機関となり準備を進めることになった。まず、セミナーは1994年11月22日～12月2日にバンガロールのインド科学研究所(Indian Institute of Science)で行うことが決まり、日本側はセミナー前半の講演を、インド側は後半の研究所見学をそれぞれ分担して立案し、実施することになった。セミナーの実施方法、講演主題、講師、見学場所の選定等、組織委員会(表1)は約1年にわたって準備を行った。若手研究者の参加募集は表1に掲げた開催趣旨書を各国の著名な研究者に配布するとともに、優秀

な35歳以下の若手研究者の推薦を依頼した。その結果、インドから17名、日本から8名、中国5名、韓国3名、シンガポール1名、タイ1名、フィリピン1名が出席した。なおこのほかにオーストラリア2名、ニュージーランド1名、ロシア1名の若手研究者が講師の資格で参加したので、総計40名となった。また講演者は、ノーベル化学賞受賞者であるY.T. Lee教授を含めて22名で、7か国にわたった(表2)。

インド以外の国から参加した講師、若手研究者の旅行日程及び旅費の手当は日本側が面倒を見ることになっていたので、個々の参加者との連絡、旅行日程の調整はすべて岡崎国立共同研究機構の事務官2名と私があたった。この作業にはかなりの時間と労力を要し、各参加者と交信したファックスだけでも膨大な量にのぼった。この苛酷な作業に献身的にあたっていただいた管理局国際研究協力課の相原課長、石川研究協力専門員に心からお礼を申しあげる。今回は幸いにもこの2人の事務官の方があたっていただいたが、これを研究者がやらなければならないとしたら研究活動を相当に犠牲にせざるを得ないであろう。今後のアジア学術セミナーの発展のためにも世話機関の労力軽減の方策を切に望みたい。

一方、セミナー実施計画の調整、インド入国のためのビザの取得、各人の宿舎の確保、はてはたまたま起こったベスト騒ぎに対する対応等、インド側の関係者のご苦勞は大変なものであった。とくにインド科学研究所のB. Bagchi教授、S. Ramasesha教授、ネールセンター事務局の方々には大変お世話になった。ここに感謝の意を表する次第である。

2. セミナーの概要

セミナーの準備は万端ととのえたつもりであったが、実際にインドに着くまでは心配がなかったと言えば嘘になる。私自身ボンベイ到着が約10時間遅れ、他の日本人の方は予約していたインド国内の航空便が客が少ないという理由で突然欠航となり泡を食ったりと、いろいろと予想しないことが多かった。

しかし、セミナー会場であるバンガロールのイ

表2 「分子科学と分子材料」に関するアジア
学術セミナーのプログラム

- 11月22日(火)
“分子分光”
- 超音速ジェット・レーザー分光 (Laser Spectroscopies for Molecules and Ions in Supersonic Jet): 伊藤光男 (分子科学研究所)
 - ジェット冷却分子の低振動振電分光 (Low Frequency Vibronic Spectroscopy of Jet-Cooled Molecules): M. Chowdhury (インド科学育成協会)
 - 小クラスターの電子分光 (Electronic Spectroscopy of Small Clusters): 茅 幸二 (慶應義塾大学)
 - 時間分解共鳴ラマン分光とその応用 (Time-Resolved Resonance Raman Spectroscopy and Its Applications): 北川禎三 (分子科学研究所)
 - 若手研究者による研究発表 (6名)
- 11月23日(水)
“分子ダイナミクス”
- 協奏的分子解離のダイナミクスとモード選択光化学 (Dynamics of Concerted Molecular Dissociation and Mode Selective Photochemistry): Y.T. Lee (カルフォルニア大学バークレー, 台湾科学アカデミー)
 - 流体中の分子緩和 (Molecular Relaxation in Liquids): B. Bagchi (インド科学研究所)
 - 多分子構成系におけるエネルギー, 電子移動のダイナミクス (Dynamics of Energy and Electron Transfer in Supramolecular Systems): K.P. Ghiggino (メルボルン大学)
 - フェムト秒コース及びラマンエコーによる振動, 回転緩和の研究 (Vibrational and Rotational Relaxation Studied by Femtosecond CARS and Raman Echo): 吉原経太郎 (分子科学研究所)
 - 化学反応ダイナミクスと分子クラスター (Chemical Reaction Dynamics and Molecular Clusters): 梶本興亜 (京都大学)
 - 若手研究者による研究発表 (6名)
- 11月24日(木)
“分子理論”
- 分子の電子構造とダイナミクスの理論の最近の進歩 (Recent Advances in the Theory of Molecular Electronic Structure and Dynamics): 諸熊奎治 (エモリー大学)
 - 水及び蛋白質の分子理論: M.S. Jhon (韓国先進科学技術研究所)
- 11月25日(金)
“分子物性”
- 分子固体の特性 (Characterization of Molecular Solids): 井口洋夫 (岡崎国立共同研究機構)
 - 分子磁性材料のデザインと合成 (Design and Synthesis of Molecular Based Magnetic Materials): 岩村 秀 (九州大学)
 - 外部共軌を有する有機系の光学及び磁気的性質 (Optical and Magnetic Properties of Organic Systems

with External Conjugation): S. Ramasesha (インド科学研究所)

- 分子材料の特異な性質—固体フラーレン (Some Exotic Properties of Molecular Materials—Solid State Fullerenes): 丸山有成 (分子科学研究所)
- 共軌ポリマーの機能性分子材料 (Functional Molecular Materials with Conjugated Polymers): 清水剛夫 (京都大学)

11月26日(土)
“分子材料”

- フラーレン, カーボンナノチューブ及び関連系の固体物性 (Solid State Properties of Fullerenes, Carbon Nanotubes and Related Systems): C.N.R. Rao (ネールセンター)
- 金属錯体に基づく新しい分子材料 (Novel Molecular Materials Based on Metal Complexes): A. E. Underhill (ノースウェルズ大学)
- 知的光媒体—基礎と応用 (Intelligent Photo-Interfaces—Fundamental and Applications): 藤嶋昭 (東京大学)
- LB膜の生成と性質 (Formation and Properties of LB-Film): D. Zhu (中国科学院化学研究所)
- 分子光ダイオードと走査プローブ顕微鏡 (Molecular Photodiodes and Scanning Probe Microscopies): 藤平正道 (東京工業大学)
- 若手研究者による研究発表 (6名)

11月28日(月)～12月2日(金)

インド科学研究所 (バンガロール市), Tata 基礎科学研究所 (ボンベイ), 核科学及び数学に関するインド政府国家センター (ボンベイ), Bhabha 原子研究センター (ボンベイ) の見学

インド科学研究所に着き不安は一掃された。南インドのカルナータカ州の州都であるバンガロールは標高700mの高原に位置する緑あふれるガーデン・シティーであり、避暑地としても有名である。市の北西部にあるインド科学研究所は広大なキャンパスを占め、うっそうと茂る大樹の森の中に由緒ある重厚な建物が点在する別天地であった。11月は乾期にあたり、澄んだ青空が拡がり、柔らかい日射しが樹々の葉に照りかがやいている風景は、ここに来るまで想像だにできなかったものである。また、よく整備された快適な宿舎はインドまでの長旅の疲れをいやしてくれるに十分であった。

セミナーの会場は、今世紀初頭に建てられた Faculty Hall という英国風の重厚で気品あふれる石造りの建物 (図1) の中にあり、これもまた英国の国会議事堂内を思わせるような200人くら

いが収容できる立派な講義室であった。セミナーは、C.N.R. Rao ネールセンター長の歓迎の辞、長倉三郎総合研究大学院大学長、菊池健日本学術振興会理事及び私の挨拶のあと、各講師による講演がプログラムに従って進行した。講演は午前2つ、午後2～3つという比較的ゆったりしたもので、討論の時間も十分に設けられた。コーヒープレークや立食形式の昼食は、講義室に隣接する貴族の舞踏会場を思わせるような壮大な部屋が与えられ、そこで討論の続きがなされたり、また講師と若手研究者との活発な交流が行われた。夕方5時から7時までの2時間は若手研究者がそれぞれの研究を発表するプレゼンテーションにあてられ、活発な討論が展開され大いに盛り上がった。

このようにすべての参加者が朝9時から夕方7時頃まで行動をとらせた1週間であった。こう書くと大変ハードな1週間と聞こえるかもしれないが、ゆったりとした和気藹々の楽しい1週間であった。なお、11月25日以降の講義は同じキャンパス内にあるネールセンターの講義室に会場を移して行われたが、ここも熱帯の色鮮やかな花でかまされたすばらしい場所であった。

3. 感想, その他

今回のセミナーは、一流の研究者による第一線の研究をじっくり聞くことを主眼としたため、これら研究者の研究に対する哲学というか、考え方、アプローチ等、通常の学会等ではとても聞けない貴重な話を聞くことができた。このように、ノーベル賞受賞者を含む22名の著名な分子科学研究者からそれぞれまとまった講演を一週間にわたって、しかも限られた少人数で受けることができたのは贅沢の極みと言うべきであろう。若手研究者はもとより講師をつとめたシニアの研究者にとっても極めて有意義であった。

また若手研究者によるプレゼンテーションも素晴らしいもので、意欲あふれる優秀な研究者がアジアで確実に育ちつつあることを実感した。若手研究者たちはセミナー開催中、同じ宿舎で寝食をともにし、互いに深い友情と強い連帯感が生まれたように思う。この友情と連帯感は、アジア地域における分子科学研究の今後の発展に重要な役割

を果たすに違いない。

インド側による種々の歓迎と接待—Get Together Party, すばらしいインド舞踊の観賞, 満天の星空の下, 豪華なホテルでの野外夕食会, 週末のマイソールへの遠足—いずれもインドのすばらしい風物と文化に触れることができた楽しい時であった。また、若手研究者の研究所見学はインドの基礎研究の現場を見、研究者のひたむきな姿に接する貴重なものとなった。

4. おわりに

以上がセミナーの大雑把な経緯と私の感想である。はたしてセミナーが成功であったかどうかは私が判断することはできない。しかし、若手研究者から私に寄せられた30以上のレポートはその評価を知る材料になるかもしれない。

最後に本セミナーの開催にあたり物心両面で全面的なご支援をいただいた日本学術振興会に衷心よりお礼申しあげたい。とくに遠路はるばるインドまで駆けつけていただいた日本学術振興会の菊池健理事、内山博之地域交流課長に感謝いたします。本セミナーの口火を切られ、最後までいろいろとご指導、ご援助をたまわった長倉三郎総合研究大学院大学長、C.N.R. Rao ネールセンター長に心からお礼申しあげます。組織委員会の方々及び岡崎国立共同研究機構管理局の方々には準備の作業で大変ご苦勞をおかけしました。ここに改めてお礼申しあげます。

インド側の暖かいおもてなしと心のこもったご配慮にはお礼の言葉もありません。セミナーを支えていただいたインド科学技術省、セミナーの運営にあたっていただいた B. Bagchi, S. Ramasesha 両教授、ゆきとどいたお世話をいただいたネールセンター事務官の Nagaraja Rao 氏に感謝の意を表します。

伊藤 光男 (いとう・みつお, 1929年生)
 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所長, 東北大学名誉教授, 九州大学理学部卒, 理学博士。
 研究課題: 分子分光法/分子の電子・振動状態。
 受賞: 日本化学会賞 (昭和63年)/日本分光学会賞 (平成元年)。

恩師

伊藤光男

私は東大出身でもなく、森野研門下生でもありません。先生との繋がりは同じ分子科学を研究する大先輩と後輩という関係に過ぎませんでした。先生は私にとって人間として、また研究者としてまさに人生の恩師であり、私の人生の節目、節目で多くのことを教えていただいた先生であります。

先生との最初の出合はもう三十数年前にさかのぼり、私が九大の助手をしていた時でした。当時、私は分子性結晶のラマンスペクトルの研究を共同研究者もなかった一人でやっていました。当時は赤外分光の全盛期でして古めかしい写真測定によるラマン等をやっているものはほとんどなく、学会に出ましても私の講演は赤外の多くの講演のあとに、全くつけたりという形で最後に回されていました。赤外の講演までは会場は大賑いですが、それが終わると潮がひくようにほとんどの人が出て行き、あとにパラパラとしか人がいない状況で研究発表をするのが常でした。

このような時、森野先生だけはいつも残って発表を聞いていただき、いろいろ質問をしてくださりました。また、講演後も励ましの言葉をかけていただきました。駆け出しの青二才にとって、森野先生のような大先生から声をかけていただくということは大変なことであり、とくにこの辛かった時にいただいた励ましが私にとってどんなに力になったか言葉に言い尽くせないものでした。声をかけた森野先生はそのような事はすっかり忘れておられました。森野先

生のこのような暖かい心遣いが若い研究者に自信をもたせ、さらに頑張ろうという気力を奮い立たせるものでした。あの時、先生にいただいた励ましを思い起こす度に涙がこみあげてくるのをどうしようもなく、あの励ましが無かったならば私の人生は大きく変わっていたと思います。このことは私の研究生活で若い人にやる気をおこさせるうえで大変貴重な教訓となりました。

その後、森野先生にはいろんな機会にいろんなお話をうかがいました。研究は楽しんでやるものだ、水島先生のこと、初期のラマン実験の苦労話、ラマンの研究で大きな魚を釣り損なったこと、ご夫婦での山歩きの楽しさ、昔、蔵王で遭難しかかったことなど、尽きることはありませんでした。そして最後に決って、伊藤君、奥さんをだいにしろよ、ということでした。先生と同じく子供のない私をおもんばかっていたの暖かい言葉ですが、それはむしろ森野先生の奥様にたいする深い思いやりと愛情をうかがわせるものでした。

晩年の数年はあまりお会いする機会はありませんでしたが、手紙でのやりとりが多く、手紙をさしあげると間髪をいれずご返事をいただいたものです。三年程前、全くヒョンなことから分子研所長に指名されました時、森野先生から所長心得についていろいろとご助言をいただきました。手紙のなかで先生は次のように書かれています。

「私は現在の中研にきて所長を勤めました、その間に、ある人の本を読んで、『所長は自分の研究を持つべきでない、判断の公正が保たれなくなる』という意見を知り感心して実行しました。私の意見は次の通りです。自分の問題を持つてばその方がズット面白いから所長事務など適当にすませて四六時中自分の問題を考えたいこと。多分、貴方も私と同じように自分の問題のトリコになってしまはれるでしょう。分子研はいま瀬戸際にいます。どうか自分の希望はグットこらえて分子研のためにつくしていただきたいと心から希望します」

このお手紙で私は森野先生からすっかり見透かされていることを知りました。先生のお言葉は、もうお前の研究は限界にきているのだから研究は若いものに任せてお前は縁の下の力持ちに徹しろ、ということだと思えます。それで、所長になると同時に自分の研究はやめることにしました。これで分子研がよくなったかどうか大いに疑問ですが……。

森野先生の分子科学へのひたむきで純粹な思い、研究に対する厳しい態度の反面、ぬくもりを感じる暖かいお人柄等、我々はいつも深い感動を覚えていました。私どももこのような感動を後輩に伝えることができればと思っている次第です。

(本文は東条会館で行われた森野先生を偲ぶ会での追悼の辞に加筆したものである。)

(分子科学研究所長、東北大学名誉教授)